

部局における教育・研究・診療・産学連携・社会貢献・国際化における特筆すべき取組と成果

(1) 特筆すべき教育活動の取組と成果(大学教育改革の支援プログラム(GP等)の採択状況と取組、グローバルCOE等の大型プロジェクトの採択・実施状況などを含む。)

グローバル COE プログラム「社会階層と不平等教育研究拠点の世界的展開」では国内外の研究者と連携しながら格差問題を多面的に解明することに努めてきた。このために東京セミナーシリーズをはじめ、数多くの国際シンポジウムの開催、海外からの客員教員の招聘、英文叢書の刊行、岩波ブックレットなどによって研究成果を国内外に広く発信した。また、英語ワークショップを当初から継続して実施してきたことによって若手研究者による国際的研究活動スキルは確実に向上した。COE 研究員に対する他大学からの割愛、大学院生の学位取得などが相次ぎ、若手研究者の育成という本プログラム当初の目標が達成されつつあると言える。全般的に見て、限られた予算の中で高度な教育研究活動を推進しており、計画以上の成果をあげていると評価できる。

(2) 特筆すべき研究・診療・産学連携活動の取組と成果

- (1) 小泉准教授(言語学)は科学研究費補助金基盤研究(S)「OS 型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研究」の代表者として、グアテマラの先住民の言語であるマヤ諸語の文処理過程について、現地のガテマラ・マヤ言語アカデミーとの共同研究を主宰している。その成果は日本言語学会第 143 回大会発表賞を授与され、*Journal of Cognitive Neuroscience* や *Linguistic Inquiry* などの国際的学術誌に掲載されるなど、国内外で高い評価を得ている。小泉准教授は平成 24 年度前半だけで 6 件の招待講演(海外 5 件、国内 1 件)に招かれた。
- (2) 我が国における方言研究の第一人者、小林教授(国語学)は文化庁委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究」を遂行し、その成果を報告書『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』(平成 23 年度)、『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』(平成 24 年度)をまとめた。
- (3) 直江准教授(哲学)は日本哲学会の「哲学教育研究会」の中心メンバーとして活動し、『高校倫理からの哲学』(全 4 巻別巻 1 巻)の編者として哲学教育の新しい可能性を示しつつある。平成 24 年度 10 月には全巻が完結する予定である。
- (4) 行場教授(心理学)は、平成 23 年度、「Visual phantom の研究」で第 6 回今井賞を、また、論文「臨場感の素朴な理解」で日本バーチャルリアリティ学会論文賞を受賞した。
- (5) 大河内教授(英文学)は論文「『フランケンシュタイン』と言語的崇高」で平成 23 年度日本英文学会優秀論文賞を受賞した。
- (6) 上記以外にも、文学研究科の教員は多くの著作の刊行によって研究成果の社会還元を進めてきた。今井教授(フランス文学)『ヴァレリー集成 V 芸術の肖像』の翻訳出版、座小田教授(哲学)『コペルニクスの宇宙の生成 第 3 巻』の翻訳出版、富樫助教(日本思想史)『奈良仏教と古代社会』の著書刊行など、平成 23 年度中に 13 冊の著書・訳書(共著・共訳を含む)を出版した。

(3) 特筆すべき社会貢献、国際化等の活動の取組と成果

- (1) 文学研究科独自で、あるいは他部局や自治体との共催で、毎年、以下のような市民向けの講演会・講座等を実施し、数多くの市民の参加を得ている。有備館講座第11期「地域再考」(宮城県大崎市 平成24年5月～9月)、齋理蔵の講座5期「地域再考」(宮城県丸森町 平成24年6月～10月)。市民オープンキャンパス「紅葉の賀」(東北大学植物園との共催 平成24年11月3日開催予定)。平成23年度は「辛酸、佳境に入る 東北を歩いて考えたこと」森まゆみ(作家)の公開講演の他、植物園を舞台にした俳句会や野点を行った。みやぎ県民大学大学開放講座「人間理解の方法論」(平成24年度は9月に6回開催予定)。東北文化研究室公開講演会(平成24年11月19日、20日開催予定)。上記の講座・講演会のほかに、文学研究科の広報誌ブックレット『考えるということ』第7号を刊行した。
- (2) 高校生対象の「第4回青春のエッセー阿部次郎記念賞」の募集事業を継続して実施し、平成23年度は11月3日の「市民オープンキャンパス紅葉の賀」に合わせて受賞者を発表し、講評を行った。平成24年3月には同賞の入賞作品集を刊行した。平成24年度も作品募集を行っており、今年の課題作品のテーマは「再生」である。
- (3) 文学部・文学研究科では学術交流協定を結ぶ海外の大学へ毎年交換留学生を送り出している(平成23～24年度は学部7名、大学院4名)。留学中の取得単位の互換認定を行っている。
- (4) グローバルCOEプログラム「社会階層と不平等教育研究拠点」の一環として海外の主要大学と共催シンポを開催し、若手研究者間の交流を図ってきたが、平成23年度は米国のスタンフォード大学とカリフォルニア大学リバーサイド校、それに香港中文大学で実施した。

(4) その他、特筆すべき活動等の取組と成果

- (1) 文学研究科教員は、多くの市町村史の編纂・執筆委員を務めている。例えば、鈴木教授(宗教学)は青森県史、相馬市史、岩沼市史などにおいて委員を務めている。
- (2) マスメディアで取り上げられた活動として、平成23年度は、小林教授(国語学)の方言保存の取り組みが朝日、毎日、読売など各新聞で、鈴木教授(宗教学)の「心の相談室」における被災者との交流が毎日はじめ各紙で報道された。尾崎教授と芳賀准教授(美学西洋美術史)はNHK教育放送「日曜美術館」にゲスト解説者として出演した。平成24年度では、実践宗教学講座の活動が読売始め複数の新聞に取り上げられ、同講座の谷山准教授の被災者支援「心の相談室」がNHKのクローズアップ現代に取り上げられた(8月29日放映予定)。